

昭和60年10月1日~11月2日

大学図書館2階展示ホール

下田歌子関係資料展

今回は、10月8日の下田先生の御命日に因み、下田歌子関係資料の中から、自筆和歌短冊及び詠草、さらに先生の成長過程に少なからず影響を与えたであろう父・平尾録蔵をはじめ、さかのぼって曾祖父平尾他山、祖父東条琴台の父祖三代資料。また本学の前身である帝国婦人協会実践女学校の資料などを展示してみた。

1 和歌短冊

(1) 幼青年期

一 冬河 見渡せば寒さぞまさる大井川 氷の上につもる
しらゆき (せき子九才 文久二年) (802)

二 山路旅行 旅行ハわがふる里をおもふ哉 山辺はゆきて
道の淋しさ (せき子十才 文久三年) (807)

三 苗代 雨すぐる賤が門田のあさしめり なハしろみづも
いとゞ増らむ (せき子十一才 元治元年) (2024)

四 雨中萩 露にさへこゝろおかるゝ秋萩の はなこき乱し
むらさめぞふる (せき子内議十三等出仕「明治七年」) (825)

五 窓竹 月てれハ唯一むら(もと)のくれ竹のかげさへ
まとに余りぬるかな (朱添削評点「青年期」) (2298)

(2) 壮老年期

一 をりにぶれて 治まれる世にあへりともこゝろせよ
そとの浜松かせさわぐなり (988)

二 暁更月 有明の月こそそのぼれ烏羽玉の よぎりはれゆく
山松が上に (990)

三 寄水述懐 塵ひぢのかゝらばかゝれ山のみの みづの
こゝろのにごるべしやは (2029)

四 色かへぬ操を千代の友として たち栄えなんやとの
なよ竹 (989)

五 燭影移水 水底の影ぞみだるゝともし火の うつろふ
きしを舟やすぐらん (2253)

(B) 和歌詠草 (3)

一帖 横綴 14.1×20 cm [明治六、七年頃]

二十才位の作 高崎正風添削

明治五年、この高崎正風らの推挙によって宮中に出仕
皇后(後の昭憲皇太后)に奉侍した。

2 版画

(1) 金剛石の歌 (979)

豊原国周画

写真一枚 昭和三十八年複写 原本 明治二十六年九月

東京 児玉弥吉板 一枚

教えているのが、下田歌子先生。この当時華族女学校
が錦絵にまでなっていたことを示す貴重な資料。

3 父祖三代

曾祖父平尾他山は、岩村藩五十石郡奉行をつとめ、学才
高く、林述斎・太田錦城等とも交遊があった。その三女
貞子の婿として迎えたのが東条琴台である。しかし琴台は
藩内学派の主流と合わず、二年後離縁となって江戸に出た。
琴台は、進歩的な学者であったため、海外交易の利便や海
防の必要性を訴えた「伊豆七島凶考」などが、幕府の忌避
に触れ、維新まで越後高田で謫居生活を送ることになる。
その琴台・貞子の間に生まれた一子が、平尾録蔵である。
録蔵は、幕末に際し、岩村藩の朝廷帰順周旋のため奔走し

たが、慶応四年事成って帰藩すると、理由不明のまま謹慎を命ぜられ、翌明治二年さらに隠居を申しつけられるという不運にみまわれている。

- (1) 他山紀行集稿本 (1170, 1171)
平尾他山著
二冊 24 cm 文政十年(1827) 七言絶句詩集
平尾他山が岩村藩主に仕えて、西濃・大坂等に派遣されたおりの作品を取めたもの。
- (2) 先哲叢談続篇稿本 (1747~1751)
東条琴台自筆
五冊 26.2 cm [天保頃] 料紙は紙背
江戸時代の儒者の評伝を集成した原念齋の「先哲叢談」の続篇として、越後高田謫居中に著述したもので、生前には刊行されなかった。(明治十六年刊)
- (3) 東条琴台書簡 (1759)
信左衛門(平尾録蔵)宛
一綴 24.8 cm [元治元年(1819)六月二十日]
世情騒然たる江戸から岩村へ書送る、不縁にして別れた家族への細やかな思いがつつられている。
- (4) 御預け謹慎被仰付候に付覚書 (1433)
平尾録蔵著
二通 慶応四年(1868)五月二日
明治維新に際して 岩村藩の朝廷帰順の為奔走した平尾録蔵は、帰藩するや、理由不明のままお預けの身となった。申し開きをしても通らなかつたいきさつを書き留めた覚書。
- (5) 不将に付隠居仰付 (1435)
平尾録蔵宛
一通 明治二年(1869)四月十三日付岩村藩差出通達
謹慎の翌年、隠居を申しつけられた資料。

4 帝国婦人協会実践女学校

- (1) 癸卯園遊会活人画写真集 (1041)
写真十四枚 四ッ切(27.9×32.8 cm) 明治三十六年(1903) 写真裏書 伊東祐亨
渋谷新校舎建設のことを聞いて、華族女学校の生徒・同窓生は、築地水交社で園遊会を催し、その収益を寄付した。催し物の一つに、彼女等の出演になる活人画が呼びものになった。癸卯とは明治三十六年の干支である。
- (2) 草創期の教職員 (2790)
写真一枚 16.4×25.5 cm [明治四十年(1907)]
渋谷の初期校舎を背景に、前列中央下田校長、その右青木文造副校長。
- (3) 校服を着用した生徒 (1864)
写真一枚 8.8×5.8 cm 大正四年(1915)撮影
生徒は、高等女学校一年生。この校服は大正十二年まで着用された。
- (4) 実践女学校附属幼稚園 (1612)
写真三枚 明治四十三、四十四年(1910, 1911)撮影
幼稚園は明治四十二年に設立され、昭和十九年まで運営された。
- (5) 実践女学校附属幼稚園卒業証書 (1613)
二枚 明治四十四年榎井静香、明治四十五年榎井春枝
- (6) 帝国婦人協会機関紙「日本婦人」 (3170, 3171)
二冊(明治四十二年第六号、四十三年第五号) 22.2 cm
明治三十二年十二月より四十三年九月まで刊行。
- (7) 下田歌子書簡 伊東己代治宛 (1361)
一通 [明治三十二年]三月二十七日付

帝国婦人協会の設立を報じ、その教育部門の事業として創設した女学校の抱負を述べ、学校開校の為の新聞広告の依頼をしている。伊東己代治は、当時東京日日新聞社長。

- (8) 渡辺千秋書簡 下田歌子宛 (2073)
一通 [明治三十四年]七月二十五日付
青木文造教諭を紹介し、推薦する。青木文造氏履歴書同封。渡辺千秋は伯爵、貴族院議員。

※ 以上、「下田歌子関係資料」の中から展示した。付記した番号()は、資料番号である。